
第二の人生はゲームの妨害？

ドリアン味のガム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第一の人生はゲームの妨害？

【NNコード】

N4660N

【作者名】

ドリアン味のガム

【あらすじ】

「…………マジですか？コレ」一人の神が呟いたその一言。別の世界の神の余りにも目に余るその所業を見て、いられなくなつた他の世界の神様…………。
そしてその戦い台無しにしようと…………。

この作品はてんびん座さんの「第一の人生はゲームらしいです～」の一次創作、もしくは三次創作です。
キャラ崩壊、キャラ死亡、努力型、転生前はリアルにチートな転生

者が戦いに横槍して混沌にする作品です。

私の仕事はサボタージュ！！ぼく神（前書き）

てんびん座さんから許可を頂いて書きます。

「第一の人生はゲームらしいです～」の一次創作です。
ベルツ側転生者側を含めてしつかりと……フフフ

私の仕事はサボタージュ！！ｂｙ神

「あ～あ～、今日も忙しいですね～」

全く、何で神様って言つのは有名すぎる神格があがりますかね……僕の手だけは忙しそうに書類に記入したりしています。

「何かこいつ、書類に目を通すのも飽きてきましたね」

僕は一瞬だけちら見し、その後書類をすべて宙に上げ……。

「ハツ……！」

「終りましたよ～！～！」

高速で判子を押し捲つた、その速度は光をも越えた！！

「そ、じゃあ次ね」

そしてまた書類を机に乗せる茶髪のサイヤ人ヘアーの少年と桃色の髪をした東洋人の少女が！～！

「ノー！！！折角終ったのに何ですか！～？」

僕が涙目で叫びますが、茶髪の少年はそれを無視し「さて、仕事仕事～」と言つて去り……桃色の少女は「うえへへ、がんばって

ね」と書いて去りました。

そう言つて僕はこの闇ざわれた魔界から出ぬことにしました！――サボタージュじやあ無いですよ！――

GO TO THE HEAVENS--. . . .

さあ！！今こそ、
救われぬ者に救いの手を！！！

「失礼しますぞ、
様」

そして運悪く扉が開いて誰かが……………って貴方は！！

ମାତ୍ରାରେ କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା କିମ୍ବା

「...ン...！」

卷之三

し、神界一のパワーで知られる究極の魔神…………阿修羅が何故ガクツ。

「大丈夫ですか？ 様」

「やつた張本人が言いますか？それを」

危うく昇天しかけましたよ……。

「で、何の用ですか？阿修羅さん」

「実は……これを見ていただきたくて……」

この人は無駄が一切無いんですね、転生者を送り出すときとかは以外にフランクでしたけど。

つかあの転生者達は本当に人間ですか？ビックリ見ても突然変異とか作り物じやあ無いですか。

「で、これは一体なんですか？」

どう見ても別の世界の報告書ですね。

神界といつてもかなり違うんですね、これがまた複雑なんですよ。

まあ簡単に言つてしまえば人間界の平行世界^{パラレル・ワールド}のような物です。

神界でもその存在は明らかにされていますが普通は他の神界、もしくは他の神界が管轄する世界に行く事は出来ません。

それはどんなに神格や神力、存在の理念が上がつても辿り付けません。

一部の例外を除けばですがね。

「……に書かれてある事を読まれてください」

「…………マジでですか?」「」

そこに書かれていたのはその世界の状況でした。

一人の人間が転生してそれで神になり…………そして他の神を殺し上位神になつた存在。

「外道過ぎるんじゃないですか、いくらなんでもこんなものを野放しにするのは危険すぎますよ」

神は殺す事が出来ない、それはあくまでこっちの世界の常識。向こうの世界の神は殺せるとしても…………これはやりすぎだ。

「まあアニメの世界とか言つのばどいでも良いんですけど……、転生者を使って争いを起こしあ数の人間を殺してますね」

これは非常にやばいですね、いずれにせよこの外道はその世界の最高神になるでしょう。

まあ絶対に私達の世界に来る事は出来ませんが…………。

「…………貴方の言いたい事はわかりました」

「お願ひします」

阿修羅はそのまま部屋を出て行きました。

「さて、転生者を作らないと」

向こうの世界のルールに乗つ取つたやり方にしなければ。そして私は机の上に「暫く留守にします、サボタージュではありません。詳しい事は阿修羅に」と書いた紙を乗せました。

本当にこの人人間ですか？

「まあ実際に見ているわけだからな」

全く信仰の無い時代から死んだ人なのに……。

「違います」

何ですか？

「ほう、このおいぼれを六道輪廻の輪に」

「これから貴方には転生してもらいます」

「この人が私の転生者です、外道とは違い普通に生まれた人です。
生まれた年が違いますが……」

「これでも私は貴方より年上なんですけどね」

「ijiは何処だ、とでも言うと悪ったか少年」

「じゃあこれから貴方には私が管轄する世界とは違つ世界に飛ばします」

「構わん」

「では能力を三つまで、いえ、貴方の頭脳に直接入れます」

入れた直後に呻きましたが大した事は無いよつですね。
さすがは武神と呼ばれるだけはある。

「…………決ましたぞ」

「では言つてください」

「なりば」の写輪眼と輪廻眼をくれるか?」

「その二つはセットです、ですからその間に万華鏡写輪眼もついて
来ます」

まああくまでこの人の写輪眼ですから能力は違つんでしょうね。

「ただ輪廻眼は弱体化はします」

魂を奪い取る力とか蘇生させる力は無理です、外道魔像の封印は三
時間すれば良いですね。
そしてチャクラではなく魔力になりますし。

「構わない、次はF a t e / s t a y n i g h t のキャスターの
力をくれるか?」

「一応弱体化はします、技術等は使えません。まあ貴方ならば自身の力で作れるとは思いますが」

あくまで能力、技術ではありませんしね。

ただこの人の場合は作れますね、前世でも色々と作つてましたし。今回はサービスとかではなく戦争に飛び入り参加ですのでやっぱりこういうのに特化した人でなければ……。

「最後は魔力は高めにしてくれ」

「分かりました、では飛ばしますよ……」

私は一瞬だけ本気になり空間を裂きました。

「ほお、これは凄いな……まさか生身で空間を裂くとは……」

「まあ良いですから早く行つて下さい」

「ふむ、ならわしが死んだときは手合させをしてもらつものだ」

「何で戦闘狂……なんですか……」

まあ良いでしょ、この人は良い意味での戦闘狂ですしつつ。

「ではわらばじゃ……」

そう言つて恐れを知らない子供の用に飛び込んでいく。

「さて、次は何人か……」

最低でも後二人、これ以上は流石にきついですしね。

「そういやさつきの人はアレを選びましたね」

良い事を思いつきました！！

— なら早くしないと!!

独立した世界ほど操作は難しいですね！！

その頃

一人目の転生者はおしめを代えられていたのであつた。

私の仕事はサボタージュ！—b y神（後書き）

リョク

「ついに始まりました…！ありがとうございます！てんびん座さん
！…！」

ルナ

「まだ出てない私なんですがそこいら辺はビツなるんですか？？」

リョク

「じつかりと罰せ受けよ、無双にはならないけど」

ルナ

「そうですか～、なら逆に返り討ちにしても良いんですね～」

リョク

「本当に出来るんならね、今回の転生者は生前が化物クラスだから

……

ルナ

「それはそうと現段階退場予定のキャラは誰ですか？」

リョク

「厨」

ルナ

「へへ、そこは確定なんですね～」

リョク

「生かしとして意味ある?...と書つよつべルシに殺されたときよつも悲惨にあるけど」

ルナ

「ふふふ～それは楽しみですね～」

リョク

「つーわけで次回はカツオ、出汁になるですーー！」

ルナ

「全然違いますよ～」の駄作

転生者と言つても所詮は人間じゃ！－（前書き）

タイトルと内容が違つ……

わしは転生者である

う。かなり昔の名前を変えて使って言つたみたもののところにもなんの

まあ別にいいんじゃがこの三年間はかなり厳しかったのう、幸い前世での能力と症状は受け継がれていたからなあ。

「ホアタ！！！」

ベ
キ
！
！

木が折れたな、魔法による身体の強化じや。

特典を貰ったおじいは見せてもらいたい情報を引き出そう取り込み理解する…………そんな当たり前の事をやっているだけじゃ。」
と言つても…………

「やはり全盛期には届かないか」

そもそも比べる事自体が間違つてゐるぢやが魔法で補えばと思つてみたものの……。

精々全盛期の50%程度じゃな。

「まあ良しとするか」

そこら辺は機械手術等を使つていたからのう、頭脳から引き出せば機械強化によるパワー・アップも可能じゃう。

「さて、ご飯にするかのう」

と、言つわけでも、飯を食べる事にする。

今田立籠を駆逐する田口也からな」

れしはをへ言ひてそこら辺は寝転んでいた小さい竪を抱きかかえた

「ストリーム」

この竜はわしが卵から返した竜じや、赤い鱗がまた綺麗でのう
ルビーかと思うほどのうじやつた。

ちなみに離の竜じや。

かるるるる「

「それはすまんかったのう、まあ」の後お主には「」飯をたらふく食べさせよう

「かるるー！」

「そうかそうか、じゃあ行くぞ」

今日はどんな飯か楽しみじゃわい。

「さて、召喚じゃな」

あの後ご飯を食い終わった後の為少し辛いがやるしかないのう。ただ知らない人間が何人か觀察しているのが分かるんじやがな。

「ふう……竜魂召喚」

何の変哲も無い呪文を唱えた。

そしてわしの懷からあるものが光り輝く。
金羊の皮アルゴンハイク、それは「ルキスの魔女メディアの持つ竜を召喚する物じや。

ただメディアはこれを使い竜を召喚する事は出来ぬ、じやがわしが生まれたのはルシエの里じや、竜を召喚するのにはたやすい筈じや。現に光り輝いているからのお……成功のはずじや。

「いいまででかい竜とは思わなかつたがのぉ」

と、言うより回りも失神しておる奴がいるのぉ、情けないつたらありやしないわい。

そもそもわしの若い頃は（省略

まあ美しい竜ではあるがのぉ、むしろ龍か。

蛇にも似た長い体躯、鹿を連想させる巨大な角、鷲を思わせる巨大な口。

「わしと共に来ぬか? 田舎なる龍よ」

取り合えずそう咳いてみたものの返答は無い。
そしてそのまま爪を振り下ろした。

グシャ!!

全く、周りは騒がしいのぉ、口しゃべりひとつ事も無いじやねん。
まあ強化を使ってなければ体は切り裂かれてたがのつ……。

「ほお、中々やるのぉ。じれ、お返じじゃ……」

そのまま爪を持ち上げ腹に一発拳を入れる。

柔らかく、肉に打ち込む感触が手に伝わる……木にしか練習していなかつたが……やはり肉に打つ感触は久しぶりじゃな。

龍はうめき声を上げ爪を振り下ろす、しかしそれを受け流す。

じやがそのせいで右腕が使い物にならなくなつたのぉ、一撃が強すぎるせいか全くと言つても良いほどじやあ。

右腕を魔法を使って治癒させつつ龍の攻撃をかわす、ただ周りの空気も一緒に引き引き裂かれてかまいたちを生み出しわしの体を傷つける。

これじやあわしが先に負けるのぉ……、といつよいつも絶対にわしが負ける。

全盛期ならば勝てると断言できる、でも今の肉体じゃあわしは勝てん、これは絶対じゃな。

「じゃが最後まで呪撃かせてもらひや、とどかぬ身だとしても」

完全に治癒した魔力を使い腹を狙う、じゃが龍は蒼く光る魔力を体中に纏、回転した。

回転した直後に莫大な魔力が竜巻となつてわしを襲う。

「このままじゃわし死ぬな」

そりやあ体中がバラバラに引き裂かれようとしておるんじゃ、強化に障壁を張つていなかつたら既にわしは死んでいた。

「まあこれを無効化する方法も思いついたが」

取り合えずわしも回転した、龍とは逆方向に、同じくこの速さで。すると次第に竜巻が次第に收まり始め完全に相殺された。

あたりに浮かぶのは薄紫の魔力と蒼い魔力じゃ……「ふふ。

「おええええええええええええ」

やつぱり回転はきつかつたの、ものす、ぐく、手持ち悪く……「ゲボロシヤア……！」

「げほげほ……流石こきつこのお……」

田の前の龍はわしの事を敵としか見ておらぬ、いや……わつあまで

はえを程度だつたんじや ろうが……。

「 もひ少しだけ足搔かせてもらひ」

「 ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

龍が咆哮し空間が歪む……。

全く、わしを転生させた神はどうしてわしをルシHの里に送つたん
じや ろうか？

この龍は本当に強い……それこそわしが今まで戦つた敵の中では
最高クラスじや ろうて。

「 撃たせると思つか？」

口の中で莫大な魔力を収束していたので顎に一発打たせて貰つた。
その衝撃で口を閉じ口の中で爆発したらしいが

「 グギヤアアアアアア！」

龍がわしを落そつと鱗を発射した、すぐに新しい鱗が生えてくるよ
うだ。

まるでマシンガンじやな、それも日本刀のように鋭利じや。
現にわしの体に切傷が出来ておる。

このままじや本当に殺される。

「 せめて洗脳、できれば服従させる事が

.....あれがあつたな、やつてみる価値はあるの。

「じゃがまづは近づかないといけないなあ」

そう言いながら黒い尖った棒を取り出す。

「行くぞ龍よ」

「 と 言 つ て も 本 当 に 刺 せ る か ど う か なんじや が。」
「 数 で 攻 め る や 他 の 転 生 者 な ら 弱 点 を 突 く な ど 色 々 と や れ る んじや ろ
う が わ し は 一 人 、 殺 す 事 も 出 来 な い か ら な あ。」

「レガシイ」

あ、今右腕が切り取られた。

そういうや三人の神のうち転生者は天使じやつたかな？

たとえ死んでなくとも生えてくるんじゃ

「クッ！！やはり戦いを経験してない体ではここまでが限界か！！」

やはりと言つた感じじゃな、前世での戦闘方法ではこの体では使えないしもうすぎる。

「じゃがーるまでくねばー！」

そして持っていた黒い尖った物を龍の首に投擲し、それはそのまま龍の首に深く突き刺さった

「ガア……？」

龍は一瞬だけ呻き声を上げるがそれに怒り、尾を振り下ろしてきた。

それはそのまま無慈悲に振り下ろされる。

「間に合つか？」

ドーンッ……

そして尾は振り下ろされた。

「間に合つたようじゃのぉ

何とかじやがな……。

「カツ……」

龍は痙攣しておる、そりやそうじや、わしの特典の一つ輪廻眼を使用させてもらつておるからのお。

もつとも死体ではないぶん、洗脳も殆ど意味を成しておらぬしそしでも氣を抜けばわしが乗つ取られる。

「ぐつ……」

体中が軋む、ここまで痛めつけられたのは死ぬ直前か？
じやがこれをせねばわしは死ぬ。

「ハア、ハア、ハア」

懐から取り出したのは歪な短剣、……。

「破戒すべき全ての符」
ルール・ブレイカー

その短剣を突き刺し、無理やり契約をする。

ある意味便利じやなコレは……。

正確にはわしが召喚したときに出来たりングを解除しより強力な物に上書きしたんじやが。

よつやく龍が大人しくなりおつたわ。

さてと、まずは腕を探さなくてわな。

「あつたな」

そこいら辺に転がっていた、かなりずたずたになつておる。

「復元」

まあわしの持つ魔法の一つである復元魔法があれば問題は無い。

「治療」

そして完全に復元した腕をつけ魔法で治す。

「よし、治つたわい」

ふう、疲れた。

「やばいな、流石に貧血で」

あ、意識が

転生者と言つても所詮は人間じや……（後書き）

リョク

「はいへ、『誰もがだらける怠惰な日々』の始まりへ

ルナ

「何ですか？その『コーナー』は？」

リョク

「ここのあとがきの『コーナー』だね、質問とか来たりしたり答えたりするやつだね」

ルナ

「それ以前に来るのかどうか」

リョク

「来なくともキャラ紹介とか色々なコーナーやりたいしネタ切れになるまでやるよ」

ルナ

「そりなんですか」

リョク

「ソーナンデス！！ついわけでこれから質問なんでもアリね……よほど酷い暴言や批判は無視するけど」

ルナ

「なら一つ聞きたいんですけど、四人目の転生者の強さなんですよ……なんですかあの強さ」

リョク

「言っておくけどあれでも転生者の前世の実力とは天と地の差があるよ」

ルナ

「化物じゃないですか？」

リョク

「まあ化物だね、生前は惑星単位を滅ぼしているお方だから」

ルナ

「そして何でそんな化物を転生者にしたんでしょうかそつちの神は」

リョク

「あの神様が転生者にする奴は生前何かを成し遂げ人の噂にならないと駄目だからね」

ルナ

「それで私の出番は何時ですか？」

リョク

「暫くは出でこない」

ルナ

「・・・」

リョク

「ちょっと待ってー何そのバットはそれで殴るつもり

」

時間は早く進むのぉ（前書き）

ようやく主人公の名前が
そしてヒロインも登場です。

ただヒロインの性格が

時間は早く進むのを

「ふう、…………」ここまで来れば安全かの？」

わしは少し前にルシトの里を追いで出された、まあ理由は既に分かっておるがの。

時空管理局と名乗る奴が長老を脅しておったのじや、正義とか言う奴は信じられん、過去に何かがあつて他人にそんな目にあつて欲しいといふのは理解できるがの。

「全く、この老いぼれがそんなに珍しいか？」

まあ珍しこと云つよりは戦力じや るいな…………。

「少なくとも追つては来なによつだしの」

あたりを警戒しながら見回すよし、居ない。

「さてと、他の転生者と戦つ為にも道具を作らんとな

戦争を行ひのじや、準備だけは怠つてはならん。

「少なくとも拠点が欲しいの、靈脈がある地で研究所があれば良いのじやがな」

前世でも靈脈は存在したしの、あれは星の生命力と言つても良い。

ものじゃからな……探せばあるかの。もつともわしの希望通りの物があるとは思えぬがの。

あつたぞ……。

わしの望み通りの物じや。
白い研究所、面積はまあまあじやが小さくは無いのよ……少し大き
いくらいじやが。

靈脈としても優秀じや大きさは結構でかいのよ、まあこの一研究所
からは人間の血の臭い《…………》。

「マトモな施設ではないじやらつな」

侵入はいとも簡単だつたがな……。
よし、最深部に着いた。

白衣を着た大人三人に金髪の子供一人か

「…………コレも失敗作か」

「リンクー」「アは正常に作動している」

「だが声が出ない」

なるほどのお、失敗作だから処分と言つ事か……
わしながら声帯くらい簡単に治せるがなあ、声については本人が出
せるようにならないといかんしのよ。

「だがこれは今までで最高の魔力だつたんだが……」

「いや、もつたひないがコレは失敗作だ、処分すべき」

「やうじやな、命を粗末に扱う御主等は処分されるべきじやな」

さすがに切れたからのお……、いくらなんでも命を粗末に扱つてはいかん。

取り合えず真ん中の男の首を折り、魔力弾で一人の首を破壊させてもらつた。

首を折られた男以外は暫くは呻いておつたがすぐに絶命した。

少女は畳然としておつた、いや、性格が無いと言つべきかのお。

「お嬢ちやんよ」

お、じつやい反応はあるようじや、つてこられは……

「虹
オツエイ
彩異色症か」

珍しいのお、遺伝子疾患かは分からんが疾患があるのであればきっと治療しなくてわな。

「まあいい、わしと一緒に来ぬか?」

あれから数年、もつわしの肉体年齢は9歳じゃ。
じやが背は特別に高いのじやがな。

あの後研究所はきつちつと掃除して色々改造してわし専用の神殿に
へと変わった。

あの研究所も時空管理局の研究所じやつたため色々データを削除
させてもらつたがのな。

「アキヤ～、お茶を持つてきてほし～のむ

「おう、分かつたぜソラウーー！」

……良い子に育つたもんじや。

今更じやがわしの名前はソラウネル・ル・ルシトじや、容姿Fant
eのメディアの幼き頃の姿じや。

そしてアキヤは金髪の少女じや、虹彩異色症の子じやつたが声帯が

すこしイカれてる程度じゃった。

無論治したがそれでも眞葉を覚えてたのが勘定したの。

それに女の子には女の子っぽい眞葉使っこしてもらいたいんじやが。

「持ってきたモノラカ…」

「すまんのぉ」

「」やべりこどりと無事…

やつらって笑うアキヤ、孫を見てこむよひじやの。

「あー」

まだジコヘルシードは発掘されてないが、正確には今発掘されようとしておる感じが。

「へえ、これがソラウの次の狙いのロストロギアなんだ」

「わらじや、」この魔力をアレに取り込ませれば

「なら俺が盗つて来るよ、発掘した時に」

「いや、これはまだ良…」

「どうして…」

「まだ時間じゃないの」

さて、これが地球に落ちた時に回収するのかの。

それならばわしの所有物になるわけじゃし。

「じゃが手駒が欲しいのあ」

ただ殺すのではなく……むやんとした手段でじゃ。

「分かったよ、俺が盗つてくわ……ちよつビ^ビ氣に入らなイ場所があるし」

何時に無くやる氣じゃのあ。

「やうか、すまんのあ」

「良いよ、ただ俺が盗つてきたり一緒に寝て欲しいだけだから

「別に構わんぞ」

「じゃ……行つて来る……」

そう言つてアキヤは出て行つた。

「さて……わし個人としてはもう少し遅く完成させたかつたんじゃが……」

わしは前を見る、そこには巨大な牙を持つ爬虫類が居た。

「」の一年で完成できるか

「アハハ！！ねえ、『ラミア！』！」

何ですか？マスター

アハハ！！凄く嬉しい！！。

「これが終つたら一緒に寝てくれるんだよ……ソラウがだよ……」

……良かつたですね！マスター！……

そう、俺はソラウが大好きだ！！

世界中を敵に回してもそれを殲滅して世界で一人きりになつてアダメとイヴみたいな関係になつてもいいと思つてゐるしぶつちやけソラウを敵と思う奴は全員骨になればいいと思つてゐる。

「だからさーこの仕事は……皆殺しで良いよな

もうのロノです、マスター

「希少な物は持ち帰るけど実験なんかしてる奴は殺す、生かさず殺

「うあじやない……即殺す……急所を一撃でしとめる」

戦場では相手を生かしといて意味は無い、戦争とかで投降してきた奴ならともかく外道な実験をしてる奴は殺す。

「ソラウは優しいからさあ、見逃したりしてるけどねえ……逃げた奴が居たら駄目なんだよ」

ソラウの敵は殺す、ソラウが認めても俺が認めない。

「だからさあ、ソラウの敵は一族郎党皆殺しで良いよね」

YES!!

「アハハハハハハハハハハ!!よし!!やる氣でてきたあ!!」

時間は早く進むのぉ（後書き）

リョク
「よし！更新完了！」「

ルナ
「ともかく私の出番も近くなつてきましたね」

リョク
「そうだねえ」「

ルナ
「で、あの俺っ子の性格やばくないですか？」

リョク
「性格だけじゃなく能力もヤバイよ、ぶつちやけ負け犬の十倍強い
し」

ルナ
「これは依存ですね～、もしアキヤからソラウを離したらどうなる
んですか？」

リョク

「一ヶ月でその次元世界の生命体の殆どが死滅する」

ルナ

「一体どんな能力なんですかそれは」

リョク

「ヒントは有害」

ルナ

「それでは次回をお楽しみに」

リョク

「ねえ！…ちょっと無視！…？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4660z/>

第二の人生はゲームの妨害？

2011年12月21日22時45分発行